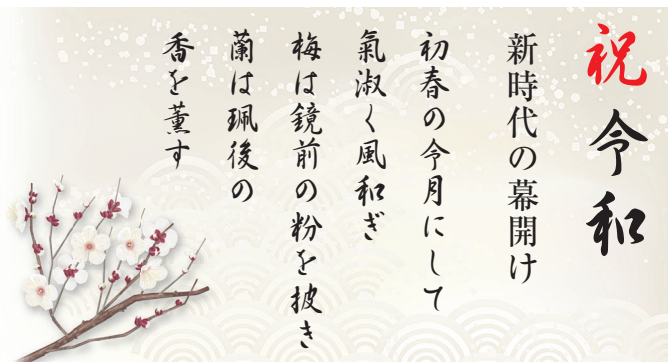




宗浦家元筆



三齋流 九曜会だより

発行

三齋流九曜会

会長 小林祥泰

事務局 出雲市今市町53

観音寺本堂に於いて

観翠庵宗瑞宗匠二十五回忌法要

宗浦家元による供茶式とお茶会

平成三十年十月二十八日、観音寺本堂において宗瑞宗匠が執り行われました(家元行事)。二十五回忌にあたる今回は、宗浦家元による供茶も行われ、参列者は、宗瑞宗匠の在りし日の面影を偲んでいました。

昭和五十年に三齋流家元の道統を継承され、山田無文老大師について修行。帰雲後は、多くの門弟の指導や、県内のみならず遠く県外へも積極的に行き、数多くの茶会や献茶式を催行し、三齋流の振興発展、拡充に努められました。その姿は「攻めの茶」の様相を呈し、流発展への大きな礎となりました。

しかし、平成六年、六十歳の若さで急逝。その突然の訃報に関係者一同は驚き、悲しみに包まれました。

改元の年、改めて宗瑞宗匠の遺徳を振り返りたいと思います。



家元による供茶(観音寺本堂)



在りし日の宗瑞宗匠

十九代家元 観翠庵二代

森山 宗瑞 宗匠

(昭和十年生まれ、平成六年)

昭和五十年
昭和五十一年

三齋流家元の道統継承
元妙心寺管長山田無文老大師について参禅。

「祥峰宗瑞」の安名を授かる。

唯一、出雲に伝えられた三齋流の奥儀を守り引き継ぐ。

同時に各地で献茶式を催行し、三齋流の振興発展に尽力した。

昭和五十一年

有馬・山田無文老大師

昭和五十三年

喜寿茶会

昭和五十四年

奈良・中宮寺茶会

昭和五十九年

有馬・山田無文老大師

昭和六十年

傘寿茶会

昭和六十一年

京都・大徳寺高桐院にて
三齋公三三四十回忌茶会

昭和六十二年

博多・聚美茶会

昭和六十三年

第一回出雲大社北島国造館
亀山茶会



山田無文老大師と宗瑞宗匠

三斎流九曜会だより

◆宗瑞宗匠が記された「お茶を学ぶ意味」をご紹介します。昭和五十一年九月に神戸の祥福寺僧堂へ掛塔される半年前に書かれた文章です。

お茶を学ぶ意味

観翠庵 森山佳朋

新緑のころになると茶事でお客を招く機会が多くなってきました。お茶を楽しむものは、花が咲くと花の下で一服お茶がほしくなり、竹の子やわらびが出るようになると香りのものが採れましてとお茶事に招きたくなる。お客を招いて茶事することは、茶の道を習うものにとって一番の楽しみであり、また日頃たくわえた実力をあらわした発揮できる発表会でもあります。

お客を招いて真心こめておもてなしをする。内外をくまなく掃除し清めて、道具を飾る。打水をし、炭をいけ釜を懸け、花をいけ香をたく。清め改められた茶室に坐して茶碗を手にしたとき、しみじみ茶を学ぶ幸せがこみあげてまいります。

お茶事をするために掃除をし、掃除が行き届いて客を招く。めいめいの仕事や暮らしは違っていても、お茶を学ぶために箒を手にし、雑巾で拭き清めよと先ず教わる。

茶筌や茶碗でなくて、自分の家庭では持つこともない箒や雑巾を手にはせよと教えらるるの、一体何を学び何を得るためなのか。掃いたあとからあとから葉が落ち、花が散る。露地の掃除に終了はない。誠心誠意の茶事することは、茶道の根本にある「清らか」なものに近づくための努力であり、がんばりです。みんなが持つている美しい心のありつたけをさらけ出して主客一体のお茶ができるように、それが毎日の生活に持続できるようにに学ばせていただくことです。

昔、中国に大竜という坊さんがいました。あるとき雲水（修行中の僧）がたずねました。「いかなるか是れ堅固法身（ほっしん）」。「堅固」とは堅いことです。悟りを開くと不生不滅、生まれたでもなければ死ぬでもない、永遠の命がわかるということですが、その永遠の命とはどういうことですか、とたずねたのです。すると大竜和尚は答えました。「山花開いて錦に似たり、澗水（かんすい）湛えて（たたえて）藍の如し」。山桜がパッと錦のように咲いてパッと散っていく。その短い命の中に永遠があるのだ。澗水、谷川は真つ青に湛えて水は少しも動かんように見えるが、実は休みなしに流れている。その動いてい

るそのまゝが永遠だ、といっておられるのです。

私たちの生活をふりかえってみて、一日一日を力いっぱい真剣に生きていく努力が大切だと思ひます。きょうという日は一生の内二度とありません。うかつに過ごせません。今という時間、きょうという日、このこという場所を大切に生活がでるために、少しでも充実したものにするために、お茶を学ぶ意味をかみしめたいものです。



家元相続の頃 祥山宗匠と宗瑞宗匠



襲名祝賀茶会献茶式

和顔愛語

杉原昭子

「時鳥こえ乃ゆくえやうらの浪」これは、宗瑞宗匠がお茶盤に書いてくださったものです。いつか直門会で寿康窯へ実習を兼ねて遊びに行ったことがあります。

私は、素焼きの茶盤に紫露草を描いておりました。そこへ宗匠が回って来て、私の描いた紫露草が目立つように正面にし、回りへうつすらとこの歌を書き添えてくださいました。この季節が来る度に、この茶盤を出し、宗匠の優しい心づかいに感謝して使っています。

縁あって、直門に入り宗瑞宗匠の許でお稽古をさせて頂きました。生来、不器用な私は、順序や恰好ばかり気をとられ、おぼつかないお点前をしていたと思います。

ある時、宗匠が「お茶は心がいちばんだから気にしなくてもいいよ。」と諭されました。そんな宗匠の寛容なお人柄に支えられ、いつしか茶の湯が私の唯一の生甲斐になっておりました。

私が家元入門した頃は、未だ印刷技術が今のように進んでおりませんでした。お稽古が終わった後、案内状をガリ版と謄写版で仕上げました。宗匠は、来賓様への招待状を自らお筆でお書きになりました。大らかな文字、心のこもったお言葉。いつも感激しました。

お陰様で側でお手伝いさせて頂いた事は、本当に有難く勉強になりました。ご家族様の気配りにも深く感謝しています。

いつも暖かい宗匠のお姿

福岡喜代美

親戚の者に連れられ、観音寺境内にある道場の門を叩いてからそろそろ四十五年になります。宗瑞宗匠が亡くなられる平成六年までの間には、結婚、出産等でお休みしていた時期もあり、宗瑞宗匠にご指導いただいた年数はそんなに多くはありませんが、その時間はとても濃いものだったように思います。稽古の日が本当に待ち遠しくて、一日も休まなかつたのではないかと思う位、宗瑞宗匠のお人柄とお教えにすっかり魅了されていました。

入門当時は、道場が稽古場で、祥山宗匠時代からの多くの男性の姿がいつも稽古場にあり、宗瑞宗匠と男性の方々の話のやり取りや真剣な稽古をみているだけで、別世界に居るような、ピンと張りつめた空気なのに、心地良い、とても幸せな時間でした。

二十五回忌も過ぎ、宗匠のお点前の姿や、稽古を付けていただいた折々に記憶がかなり遠くになっていますが、思い出す宗匠のお姿は、私の中にはいつも同じイメージ

ジしありません。それは、いつ稽古に伺ってもいつも同じ雰囲気、で暖かく迎え入れて下さり、稽古も、穏やかなのに、言われる事には迷いがなく、スーッと心に入っていくという感じでした。厳しい指導はほとんどありませんでしたが、私の記憶ではただ一度だけ、お点前を間違えた所で次の人に代わるという稽古の時がありました。初めのところで間違えたら自分の稽古はそこで終わりになるのですから、少しでも長く点前を見ていたかったです、真剣に稽古した覚えがあります。

家元から直に学べる事は本当に有難く恵まれた事です。今になって宗瑞宗匠からもつと話を聞いておけば良かった、見ておけば良かったと思うことが沢山あります。今、宗浦家元の下で学ばれている方は、後になって後悔の無いように沢山の事を真剣に家元から学び、吸収して頂くください。

― 第四回 ―

先達探訪

三齋流の先生を訪ねて

今回は長年、九曜会や雲南翠木会でご活躍の辰村栄先生です。先生の体調を考慮して社中の方に聞いて頂き、お手紙でご協力頂きました。社中の方も先生の教えやエ

ピソード等をお話しくださいますので、併せて掲載いたします。



辰村栄先生

◆まず、三齋流との出会いについて伺います。

昭和三十五年頃、木次町天野館の先代奥様よりお誘いを受けました。

先生は、三刀屋町峯寺の御住職松浦快芳師でした。母が若い頃に三齋流を習っておりましたので、何の拘りもなくお茶の世界へと惹かれていきました。年に数回は峯寺でお稽古したり、お茶会もあつたりして楽しく、一心にお稽古に励んだ昔を懐かしく思います。

◆祥山宗匠との思い出は？

祥山宗匠との出会いは、お茶を習い始めて最初の翠木会初釜の時でした。初めてお目にかかる宗匠は大きな大きな山を見るようで、私は尊敬の念を抱いておりました。観翠庵にも通わせてもらいましたが、いつも緊張し、お稽古から帰ると習ったことをすぐにノートに書き留めるようにしていました。また、宗匠には、色々な所にも連れて行って頂きました。

◆宗瑞宗匠との思い出は？

宗瑞宗匠から戴いた「耕不尽」の書をお茶室に掛けて、宗匠の教えを受け継ぎ、弟子に教えていくことで、宗瑞宗匠と心の繋がりがあつたように思います。

（社中の方のお話より：以降、社中と表記。）お稽古の時は、只お点前に集中していましたが、いつも宗瑞宗匠に見られていたような気がします。

◆お茶とは、先生にとって何でしょうか？

生甲斐です。お茶会が心底好きで、道具の取り合わせをあれこれと考えるのが楽しみでした。（社中）私たちは打ち合わせで困ったことがなく、



先生は、道具について誰でも答えることが出来るように教えてくださいました。また、お花を持つて行くときすぐに生けてくださり、小庭に茶花も植えておられます。短歌も詠まれます。お茶や短歌を通して季節を取り入れ、暮らしを豊かにされていると思います。先生の人生は、お茶なしでは考えられません。

◆特に印象に残るお茶会は？

細川護熙公ご臨席の道場築四十年記念茶会（平成十四年十一月十七日、観音寺にて薄茶席担当です。細川公はいらっしゃいましたが、いつものお茶会のようにお点前、お運び、水屋と役割分担して全て弟子に任せておりました。

（社中）私たちは大変緊張していましたが、先生は「大丈夫。」と繰り返し言われ、どんと構えて居てくださいました。今回が特別ではなく、いつでも一服のお茶に心を込め、美味しいと思ってもらうことが大事だと教わりました。

◆後輩やお茶をなさっている方たちに伝えたいことは？

弟子が、お茶を習うことを通して、人として成長することを願っています。

お茶で習った事を日々の生活に活かして行かれると良いと思います。お稽古を通して、生活の中で季節を感じられるのがお茶です。近頃は、食生活や住まいなどに季節感がなくなつてきています。花一輪にも季節があります。茶盤を取ることも一つでも、暮らしの中の何気ないところにお茶の所作が活かされると思います。

また、もっと気軽にお茶を楽しんで頂きたいです。平成六年六月に大東町海潮荘で蜷見の茶会を致しました。終わってから、バスで

蜷見に行きました。本当に楽しく懐かしい思い出です。社中でも気軽に色々な所でお茶会を致しました。弟子の家の庭先や病院の前の桜土手、駐車場で見えもしました。どれも懐かしく思います。

（社中）先生は「まあ大丈夫。」が口癖ですが、お稽古に行くといつも香が焚いてあり、着物を着てびしと指導され、身が引き締まります。ご自身の姿で私たちに教えてくださっていたと思います。お茶会で後見をされると、お茶席が和やかな雰囲気になります。初めての方にも解りやすく話され、正客の方との会話も場に応じていて、聞いているととても楽しいです。

先生と出会ってお茶を知り、誰でも仲間として受け入れて我慢強く教えてくださる先生に、心より感謝しています。改めて、宗瑞宗匠からの思い入れ「耕不尽」を、大切になさっていたんだと思います。今度は私たちが、先生の教えを伝えて行きたいと思います。

◇辰村先生をはじめ、社中の皆様にご協力頂き、感謝申し上げます。

尚、雲南翠木会四十周年記念誌より一部参考にさせて頂きました。（広報部）

茶 育 論

和 田 貞 夫

◆茶育とは

茶育とは聞き慣れない言葉である。それはそのはずで筆者が今、机上で造成した言葉であり、まったくの私論であるからである。

昔から食事の場を通して食べ物の有難さや礼儀・作法を教える事を食育と称し、学校給食の指導目標にも掲げられて大切にしていた。

最近では、森の中で自然の恵みや生物・植物の生きる姿を学ぶ教育を森育とか木育と称している。

近年、九曜会では子ども達の茶の湯の体験や若い人達の茶道修行を推進する事業の展開に力を入れており、筆者はこれ等の事を茶育と呼んでよいのではないかと思つて筆を執つたのである。

◆高校生の茶道交流

昨年、不昧公二百年記念事業として高校生茶道交流会が松江市で開催され、中国地方から六校の高校茶道部が参加、広島修道高校（上田宗箇流）・岡山山陽女子高

校（裏千家流）・米子松蔭高校

（裏千家流）島根県から松江南高校（不昧流）・松江東高校（不昧流）・松徳学院高校（三斎流）が

参加してお点前を披露して互いの交流を深め、日本の伝統文化を学ぶ貴重な場となったという。

また先日は、東京の慶応高校茶道部が修学旅行で松江市を訪れ、松江農林高校茶道部と合同茶会を開いて交流し、日本の伝統文化の良さに触れて大変良い勉強をしたと喜んで帰つたとの報道がなされていた。

筆者は、出雲高校二年の時に、悪友から「茶道部へ入ると女生徒のサーブスでお菓子が食べられてお茶が飲めるぞ」と誘われ、既に音楽部・文芸部・図書部と多忙な部活動生活であったが、誘惑により入部したのである。共に入部した友は、一橋大へ進んだ秀才のあ

る男ではあったが生涯の悪友であった。茶道部の指導者は、家庭科の荒木俊子先生（現姓長谷川）という三斎流の茶人で九曜会の山崎智恵子先生の姉上であり、実に

奇遇な出会いであった。

同じ高校生でも、前述の高校生達と高校時代の筆者とは、その茶道部員としての心掛けに雲泥の差があり実に汗顔の至りである。

◆日本の伝統文化「道」

日本の伝統文化には、「道」という独特の文化がある。「道」には、必ず基本となる型がある。その基本型を大切にして、その型を繰り返し練習、稽古によって身につく心の豊かさ、内面的な深い精神性を重んずる文化である。

その基本型とは、先人の創意工夫によつて、その本質が把握され歴史の試練の中で耐えて生き残つたものである。

ただ単に、お茶を飲む、花を生ける、勝ち負けにこだわるのではなく、「道」の文化は相手に対する思いやり、礼儀・作法を重んじて技量を磨くことによつて、更に心を磨く人格の形成を目的とするものである。それによつてお茶飲みが茶道に、花生けが華道に、剣術が剣道、柔術が柔道となるのである。

◆「相撲道とは何か」を読む

久方振りに書棚から元横綱大鵬が書いた「相撲道とは何か」を取り出して読んだ。彼は「相撲は礼に始まつて礼で終わる」と説き、

勝負だけにこだわるのではなくて、稽古を大切にして体を鍛え、技を向上させて心を磨き人間を豊かにすることが大切で、禮とは人の心を豊かにする事であると言っている。また、相撲取りを力士と呼んでいるのは、武士と同様に士道を重んずるから力士と呼ぶのである。しかし、最近の外国人横綱が勝負にこだわり張り手やかち上げ、敗者へのだめ押し等を繰り返したり、判定への不満や客に万歳三唱・三本締めを強要するなど、伝統秩序に反する行動は実に嘆かわしい次第である。相撲協会から処分を受けたが当然であろう。大鵬は「道がつく以上は、強ければよいのではなくて正義感や思いやりなど豊かな精神性・品格を磨く事が大切である。」と言っているが、まったく同感である。

◆心を豊かにする茶の湯の「道」

茶道という言葉が使われる様になったのは、十七世紀の初め頃からである。ただ茶を点てて飲むのではなく禅の精神を取り入れた作法が重視され、茶の湯の「道」を究めるために修行するという意味から使われてきたのである。

千利休は、「茶の湯は仏法を以つて修行・得道する事なり。」（南方録）と説き、「自分で水を汲んで湯を沸かし、茶を点てて仏前に供え人に施し自分で飲む。働く事の尊さと仏に対する謙虚さ、人に施す豊かな心、花を生け、香を焚くゆかしさ、これが真の茶の湯の心であり、何よりも心の持ち方が大切である。」と教えている。

明治時代に東京美術学校の校長であった岡倉天心は、外国人に対して「茶道の原理は倫理と宗教とを一つにしたもので宗教芸術そのものである。」（英訳「茶の本」）と説明し、茶道文化の宗教的な深い精神性が日本の芸術文化の発展に多大な影響を与えたとして、茶人達の努力・貢献を高く評価し賞賛をしている。

「和敬・静寂」という言葉が、よく茶の湯社会では使われているが、これは一休宗純に参禅し茶禅一味の境地を開拓した室町時代の茶人、村田珠光が創唱した言葉であるとされている。この言葉は、千利休の茶の湯の精神を表し茶禅一味の理想的な境地を集積したものととして、江戸時代初期頃から盛んに唱えられてきた。

・和敬―主客がお互いに認め合つて尊重し合う。
・静寂―心を清め寂然不動の心境に入る。

茶の湯では、和敬・静寂の心を持って修行することが一番大切であるとされている。互いに敬い合いい認め合つて清らかな心で接する



楽しいお抹茶の体験

ところに、和が生まれるのである。
松平不昧も「茶の湯の本意は、知足である。」と説き、欲を捨て迷いから抜けて清らかな悟りの境地に至る「足るを知る」事が人間として生きる最も大切な心掛けであり、安らかに和やかに生きる人間の姿にふさわしいものであると教えている。「伝家法」という書には「足るを知る者は、心富む。」と禅の教えを説いている。

世情が混迷を深め不安の多い現代社会にあつては、この様な安らかな和やか心を持つて生きる事が求められている。世間では、ややもすると茶人は、山中の草庵に住いる隠者の姿を想像する間違つた考えをする人がいるが、表千家六世寛々斎家元は、「茶事は敬礼の遊びなれば、それぞれの家業に精勵し、その余力を以つて習ひ楽しむべき事なり。」と言つており

決して世捨て人になる事ではなく、日常生活の中で和敬の心を大切にして人々と交わり仕事に熱心に取り組んで、その余暇に茶を楽しむ事だと教えている。

茶の湯は、現代の人達に豊かな人間らしい生活を送るためのエネルギー・活力となるものであると筆者は確信してやまない。

◆学校教育に「茶道」を

学校教育の正課に茶の湯の礼儀・作法が初めて取り入れられたのは、明治八年（一八五三）であるが、跡見学園の創立者である跡見花溪が、女子教育における礼儀・作法の学習としての茶道の重要性を主張して正課に取り入れたのであった。

以来、華族学校や共立女子職業学校において茶道が正課の授業に取り入れられ、学校茶道が興隆していくが、やがて華道・書道・柔道・剣道等が学校教育に導入されて発展していく。筆者の小学校時代には書道と剣道が、旧制中学校の時は書道・剣道・柔道の授業があつて基本型と礼儀・作法を厳しく教わつた。女学校では茶道や華道の指導が行われていた。

現代の学校教育では、教育内容が多様化し学習指導要領で規定されているので「道」の学習は、それぞれの学校の特色を生かして総

合学習や部活動で行われている。

「道」の学習はただ単に技術を習得するだけではなくて、究極の目的は、豊かな人間形成を目指すものであるから、是非子供たちや若い人達に「道」の文化を学んで欲しいと願つてゐる。

先日、筆者宅に若い農協職員の訪問があつたが、実に礼儀正しく応接態度も立派であり感心したところ、彼は筆者がかつて校長をしてゐた学校の卒業生と分かり、ぜひ一服をとお茶を呈したのである。飲み方を知りませんのでご無礼しますと言いながら、その所作は作法通りであつたのでよく勉強しているのではないかと誉めたところ、実は子供の頃に保育園の先生に少し教わつた事があるとのこと、言葉遣いや客に接する態度・茶の作法など実に立派であつた。これぞ真の茶育の成果の賜物であると感じ入つたのである。

◆稽古は挨拶から始めよう

文頭で筆者は、高校時代に不純な動機で茶道部へ入部し肩身の狭い思いであつたと記述したが最

近、遠州流十三世小堀宗実家元の教えを読んで少し安堵したのである。それは「お茶の稽古は、美味しいお菓子が食べられるからと始めても良い。ただお先に、大変結構でした、ご馳走様でしたの三つ

の挨拶の言葉を大きな声を出して言う事から始める事が大切である。」（お茶の不思議）との説明で、「次代を担う子ども達に、茶道を通して美しい日本語とその心を伝えていく事が、自分のライフワークである」と語つておられる。



「お先に」には、自分が先にはなく、お先にどうぞという相手を優先する優しさのこもつた謙虚な態度を示すものである。また、「大変結構でした」は、相手に対する思いやりの心を表したものであり、「ご馳走様でした」は、感謝の心を伝える言葉である。この三つの言葉を大きな声を出してお茶の稽古に励めば、最初の頃は意味が分からなくても成長するに従つて理解できるようになつて、必ずや自分の心として育ち自分の身に付き、豊かな人間の行動力となるのである。

特に他人の事を考えないで自己中心的な人間の多い現在の世の中にあつてお茶をいただいた後「大変結構でした」と挨拶する事、相手を思いやつて感謝する気持ちを伝える事は大切な事である。

お茶の稽古の時には、是非とも

◆明日に生きる九曜会事業

すっかりとお菓子を食べてお茶をいただきながら、大きな声で三つの挨拶の言葉を繰り返して、茶の湯の勉強をして欲しいと思う。

最近、九曜会では特に保育園・幼稚園・小学校・中学校・高等学校・高専大学等の皆さんや若い人達に対する、茶の湯の体験機会の提供や茶道学習の場の設定等、茶道関係団体・施設機関と連携して事業が進められているが、今後共に一層強化推進を望み期待しているので、関係者の皆様のご協力ご支援をお願いする次第である。

人間教育の一端を担う「茶育」の推進によつて、二十一世紀に生きる豊かな美しい日本人が育成されん事を願つて筆を置く。

◆奉恩謝茶

高校生時代に茶道部へ入部して以来、中断していた時期はあつたが、米寿の歳を迎えた今日迄、終始三斎流の茶を嗜んだ事は、実に至福の人生であつたと追憶、お世話になった関係各位へ万感の謝意の念を表する今日この頃である。

九曜会事業報告

平成三十年七月～令和一年八月

○九曜会総会

平成三十年七月十六日(月・祝)

ホテル武志山荘

担当 役員、事業部、直門(薄茶席)

平成三十年度総会が、ホテル武志山荘を会場に開催されました。

小林祥泰会長、宗浦家元のご挨拶に続き、二十九年度の事業計画、決算報告、三十年度の事業計画、予算書の審議が承認可決されました。米寿の会員の紹介とお祝い、道場掃除の皆勤者の紹介等がありました。

午後は、一畑寺・飯塚大幸管長による「仏祖のことば」と題した講演を拝聴しました。



一畑寺・飯塚大幸管長



小林会長

○不昧公二〇〇年祭
記念茶会

平成三十年九月二十一日(金)

十月十三・十四日(土日)

赤山茶道会館

担当 直門・大野社中

来客数 七四・七四・七五名

松平不

昧公没後

二百年を

記念し、

十四の各

流派、団

体が松江

の各地で

釜を掛け

ました。

三齋流は、

松江城太守を

望む赤山茶道会館で、

宗育宗匠を

席主に、

薄茶の長板一段で

ご奉仕

を致しました。

東京、千葉、

神奈川、静岡、新

潟、福岡、大分、

熊本等、県外か

らのお客様も多数

お越しいただき

き、席中での会

話も三齋流の歴史

やお点前につい

ての質問が多く、

お客様の関心の



三齋流紹介席



当日は展観席の他、今回初めて「三齋流紹介席」を設け、三齋流や観翠庵の歴史、九曜会の活動についてパネルで紹介致しました。

(直門 梶谷旭生)

○亀山茶会

平成三十年九月二十四日(月・振)

献茶式午前十時より

【濃茶席】

北島国造館 奥書院

担当 福岡社中

来客数 一四八名

当日は中

秋の明月に

当たり、月

をテーマに

して献茶式

に釜を添え

させていた

だきました。

三連休で、

各地で様々

な行事もあ

り、また、不

昧公二〇〇年祭茶会と

も重なったので、

お客様はいつも

より少なかった

ようです。

濃茶席担当で

点前をするのは

初めての者ば

かりでしたが、

北島家の

奥書院という

勿体ないところ

で

良い経験させ

ていただきまし

た。受付等役

員の方にはお

世話になりま

した。

(福岡社中 福岡喜代美)



【薄茶席】

北島国造館 亀山会館

担当 大平・樋野・山本社中

来客数 一六五名

生活様

式の変化

と時代の

移りに応

じて立礼

形式は、

茶道・茶

の湯の振

る舞に必要

となり、広

まっています。

この立礼卓

での席を、

この度

初めて担当

致しました。

立ち居に

よって、気

持と足運び

が軽過ぎな

いように、

また、動作

の早さを使

い分けられ

るように留

意して行い

ました。現

代風なお席

が、会場の

様子とマツ

チするように

と、考え

ました。そ

の時、温故

知新の言葉

が浮かびま

した。

心を開き、

視野を広げ、

知識を

求めたいと思

っていました。

この

度の担当は、

精神面がより

深まったと思

える、有難

いものでした。

観翠庵家元・

ご家族様のご

指導の下に、

会員の役割

を担えて、嬉

しい一日でし

た。

(山本社中 山本ますみ)



○松江城山茶会

平成三十年十月二・三日(火水)

赤山茶道会館

担当 大田・安来・米子社中

辰村・沼社中

来客数 二六九名・三五七名

茶会当日に台風が襲来するとい

うアクシデントが有りましたが、

無事に開催出来ました。お客様は

少ないのかなと思いましたが、東

京・横浜・名古屋・京都・倉敷・

神戸・島根県内と各地から、この

茶会を楽しみに、ご来場いただき

ました。

釜が広口尾垂で欠風炉を使い、

大蓋の点前を致しました。

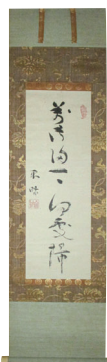
お茶会中、お客様と先生の会話を

聞いていて嬉しく思いながら、

お点前を致しました。楽しい時間

を過ごさせていただきました。

(大田社中 川瀬清恵)



○一畑薬師茶会

平成三十年十一月十七日(土)

一畑薬師 東陽坊茶室

担当 野々村社中・加茂会

来客数 三二五二名

第二十三回一畑薬師茶会は、途中から雨が降りだしましたが、その雨が上がリ、障子を開けて眺めると墨絵の如くの大自然が広がっていました。東陽坊から見る景色を茶席のお客様に楽しんでいただきましたと思います。

二畳の床には山田無文老師の「和」を掛け、薄端には色づいた山錦木と蔓梅もどき、初嵐を入れ、男子の点前による長板三段を致しました。

席入りは書院の立礼席（他流）、それに続く三斎の席の順で、この時間の流れに気を遣いながら、担当者全員、心を合せて務めさせていただきました。

(野々村社中 永井久子)



○和文化祭り茶会

平成三十年十一月二十四日(土)

出雲文化伝承館 松籟亭

担当 さくら会

来客数 四二五五名

出雲文化伝承館で開催された和文化祭りにおいて、さくら会が担当の機会に恵まれ、新たな学びを三つ得られましたことを感謝と共に報告致します。第一に、子供への茶道啓蒙効果です。茶道に触れる機会となり、身近に感じることで出来たと思います。第二に、一般客へのPR効果です。お点前無しで出入りが自由な空間だった事が敷居を下げ、魅力を伝えることが出来ました。最後に、会員が呈茶の一連の流れを経験した事となりました。稽古の成果を、発揮する場となりました。

今後とも会員が学びを共有し、流派の発展と普及に邁進して参りたいと思います。

(さくら会 三島羊子)



○三斎忌

平成三十年十二月二日(日)

【濃茶席】

観翠庵道場 松霞亭

担当 山本社中

参加者数 四四名

名残の紅葉がはらはらと散る晴天の中、三斎忌の濃茶席でお点前をさせていただきました。

濃茶のお点前をするのは久しぶりで、また、お稽古不足もあり、大変に緊張して当日を迎えました。先生の「おもてなしの心で、その日出来る精一杯の事をすれば良い」の言葉を力に臨みましたが、やはり濃茶は難しいと思います。知られる一日となりました。

支えてくださいました先生方、お越しいただいた皆様方に、満足いただけるお茶を出せるように、精進を重ねていきたいと思います。

(山本社中 石橋純子)



【薄茶席】

観翠庵道場 富士の間

担当 伊藤社中

参加者数 四七名

平成最後となる今回の三斎忌は、十二月とは思えない穏やかで気温も十八度と暖かな法要の席となりました。本年は宗瑞宗匠の二十五回忌もあり、深い思いで南無観世音のお軸に、宗瑞宗匠の竹花入に美男葛と野路菊を添えしました。宗浦家元はじめ諸先生方にご入席いただき、終始ゆつたりとした和やかな席となりました。また今回出られませんでした、九十四歳となられます伊藤先生へ、皆様方からの温かい言葉や席の様子を報告しますと、目を細めて喜ばれ、社中一同、無事に席担当を終えることが出来たことに、感謝の気持ちで一杯になりました。

(伊藤社中 高野明代)



○早春の茶会

平成三十一年三月二十三日(土)

出雲文化伝承館 松籟亭

担当 下垣・山田・加儀社中

来客数 四一三名

平成最後の早春の茶会は、松籟亭にちなんだ取合わせと、釣釜で皆様をお迎えしようという準備を致しました。お軸は大綱和尚の「聴松風」。元号が変わっても松樹のように変化せず、めでたさが続きます様にとの願いです。そして釣釜のかすかに揺れるさまを、皆様へのおもてなしと致しました。

一席目は家元と、翌日本番を控えての「出雲フィル」の指揮者中井先生、細川ガラシャ夫人の交響曲を作曲された平野先生、制服を着た沢山の女学生さん等で、お茶席が始まりました。三社中一人ひとりが、一服に心を込めてご奉仕をして終わることが出来ました。

(下垣社中 下垣孝子)



○新樹の茶会

平成三十一年四月二十九日(月)祝

【薄茶席】

観音寺 書院

担当 杉山・杉原・佐藤社中

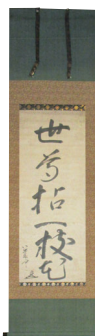
来客数 二二二名

五月一日の平成から令和への改元が近づき奉祝ムードに包まれた中、新樹の茶会を担当させていただきお祝出来たこと、感謝申し上げます。

床は細川光尚公幼少の筆「世尊拈一枝花」、花入は竹一重切「寿老」(昭和大典御月日涉園の竹を用)閑院宮下賜以御紋菓作の香合、宗浦家元手造の茶盤「思川」等で、お祝と平成を振り返っていただくこととの思いを込めお迎え致しました。

雨に打たれ緑が美しい観音寺の庭を眺めながら、男子中学生やアメリカの女性も加わった運びに新時代の到来を感じつつ、平成最後の茶会を愉しんでいただけのことと思います。

(杉山社中 錦織君子)



【呈茶席】

観翠庵道場 松霞亭

担当 山崎社中

来客数 二〇二名

今回の新樹の茶会は、「平成」最後の茶会となりました。観翠庵の松霞亭で流祖三斎公の尊像に見守られながら、時代の節目を感じていただけるようにとの設えでお客様をお迎えしました。心配した雨も持ちこたえ、多くのお客様が足を運んでくださいました。宗浦家元の「喫茶去」のお軸でお出迎えた呈茶席。時間帯によっては一席十五名となり、「お楽になさつて」いただけない席もありましたが、皆様笑顔で和やかな席にしてくださいました。瑞々しい新緑の庭を愛でながら、お茶を味わっていただけたのではないかと思います。

(山崎社中 杉谷恵子)



○出雲大社茶会

令和元年五月十五・十六日(水・木)

おくにがえり会館

担当 今岡・山田・下垣・加儀

野々村社中・加茂会

来客数 四一名・三四六名

令和に入り初めての席を、おくにがえり会館で奉仕させていただきました。床には宗瑞宗匠の「彩鳳舞年需」の軸を掛け、令和の色(梅の紅、堇の紫、桜のピンク)を使い「慶雲」と名付けたお菓子に華やかな中にしつとりとし、奉祝ムード満載で大変好評をいただきました。

台湾からのお客様が、日本文化を堪能出来たと受付へ声を掛けてくださいました。また、九曜紋の袱紗に興味を示される等、感心を持っていただきました。六社中合同の上、安来・米子・松江の皆様に応援をいただき終えることが出来ました。感謝いたします。

(野々村社中 野々村和子)



祝・米寿

おめでとつございます

九曜会会員の皆様の中で米寿八十八歳(昭和七年生まれ)の先生方をご紹介します、お祝いを申し上げます。

和田貞夫先生(副会長)

杉山郁子先生(杉山社中)

沼美代子先生(沼社中)

古谷益子先生(米子社中)

菅 絹江先生

○講習会

令和元年六月二日(日)

出雲文化伝承館 松籟亭

担当 研修部

受講者数 六六名

新たに天皇が即位され、令和の新元号になって初めての講習会。七十名近くの方に参加していただき、午前は家元様に監修いただ

た資料を元に、七種の蓋置の取り扱い、使用時期等について講習。

午後は「お茶事」について家元様の講義。迎付から炭点前・懐石・濃茶・薄茶に至るまでの流れ、時間、準備について詳しく教えていただきました。「お茶事は大変」というイメージを持っていましたが、「道具はメイン一つあれば可能」「当日までに七から八割が決まる」「稽古は茶事の部分的なもの」等のお言葉に、お茶事の意義を感じとった一日でした。

(研修部 錦織君子)



ご冥福を

お祈り申し上げます

横井謙二郎先生

(平成三十一年一月)

須藤 昌幸先生

(平成三十年八月)

★長年に亘って、九曜会の活動にご尽力いただきました。